

伊勢湾台風と名南三川(続)

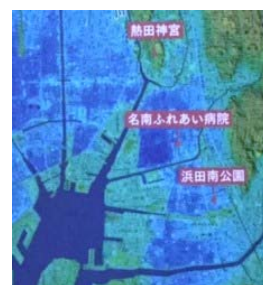
今日は伊勢湾台風から 58 年。時の流れを感じるが、いくら歳を重ねても、「あの日」のことは、けっして忘れられない。今年も伊勢湾台風の記憶を記録するために、名古屋南部のまちを歩いた。

写真は今年 7 月、名古屋港ポートビル展望室から撮った山崎川河口付近。手前は堀川。河口から 3 つ目の橋が、5 月に歩いた「道德橋」だ。



手前の竜宮町や木場町の向こうが、道德あたりだと思う。

山崎川と堀川に囲まれた名古屋市南区道德地区は、堤防が決壊して浸水に見舞われ、台風後も長期にわたり水が引かなかった。写真下は『名古屋地図さんぽ』による。「名南ふれあい病院」のところが道德地区で、濃いブルーが目立っており、ひときわ地盤が低いのがわかる。



昨日も紹介した『伊勢湾台風 名南三川復興誌』の南部学区別死亡者分布図によると、最高は地図下の天白川北のブルーあたりの白水学区。次いで、その北の宝学区、港区の南陽学区など。



復興誌の第 3 章 伊勢湾台風による被害状況

1 概況から(仮名遣いなど一部修正した)。

「わが国台風史上屈指の勢力を持った台風は、名古屋にとって最悪のコースで襲ってきた。

すなわち伊勢湾一帯は台風に向かって右側の強風圏内に入って、その猛烈な南よりの暴風は間断なく吹きまくり海水を湾奥に送り込み、いやが上にも高潮を発達せしめた。また台風の通過速度が伊勢湾内の長波の進行速度とほとんど同じであったことも、共振れによって一層高潮を増大させたものと考えられる。このようにしてもたらされた高潮の発生が折悪しく夜間であって、その上に強風のため停電し、まったく暗黒と化しラジオの台風情報を聞く術も失なわれ、重なった悪条件のもとで、ただ不安におののいていた人がほとんどであった。

それにしても高潮の侵入速度は恐ろしいほど急激であって、事前に避難できなかった人々にとっては潮が来てからではすでに手遅れであって、自分一人の身を護ることも容易でなく多数の人命が一瞬にして失なわれていった。

名古屋市南部の堤防の高さは平均 T・P(+) 3.30m 程度であり、発生した高潮よりも 60cm ほど低いため、河川の下流部より順次高潮は堤防を乗り越え、堤内背後地になだれ込んでいったとことと想定される。

このため港に面する重工業地帯は埋立地であるため満潮面より高いので、高潮時のみの一回の冠潮ですみ、比較的施設等の被害は軽かったが、その奥一帯の干拓によって形成されている土地は海面下であり、堤防は寸断されて高潮の過ぎ去った後に至っても、へドロに汚れた海水の渦巻く恐怖の港と化し、この状況は堤防の潮止め工事が完了し排水作業が進んだ10月中旬まで続いたのであった。

名古屋南部の被害を特徴づける要素に、この被害を倍加せしめたものに、流木の猛威があげられる。

この一帯は木工業の中心であったので、8号地、加福町、名港の各貯木場に加え、入江等に当時大量のラワン材が貯留されており、これが高潮とともに一斉に背後地に流入したため家屋等の破壊に一層の力を加えた。

ことに8号地貯木場は外海に面していたため、一線堤防は約1kmにわたって壊滅したうえに、不運にも貯木場には満杯に貯留されており想像に絶する痛手を周辺に与えた。このように不運の重なりによって、名古屋市南部は史上空前の台風被害を受け、1800余名の尊い人命が失われたのである。

(2017年9月26日)